

【ショートレター】

オンライン海外研修での国際共修の可能性と課題†

—三重大学ベトナムフィールドスタディを事例に—

奥田久春*・松岡知津子*2

三重大学教養教育院*・三重大学国際交流センター*2

本稿はオンライン海外研修での国際共修の可能性と課題を考察することを目的とし、直接海外を訪問する国際共修とどのような点で異なるのかを検証した。事例として三重大学の短期海外研修のベトナムフィールドスタディを取り上げ、学生が学んだり経験したりした内容を国際共修で学ぶべき視点と照合した上で、ベトナムでの過去の研修における学びと比較した。その結果、他文化の知識と文化的多様性への理解に繋がる学びや経験の可能性が見られた点で国際共修の成果を見出せる。しかし時間的、空間的な制約から、文化を超えたコミュニケーション、視点の相違の理解や五感を通じた理解といった互いを知るための機会が更に必要であることも示唆された。

キーワード：国際共修，オンライン海外研修，ベトナムフィールドスタディ，COIL

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症の拡大にともない、留学や研修等で直接海外を訪問する機会がほぼ失われた。ほとんどのプログラムが延期に止まらず中止にせざるを得なかったが、オンラインプログラムに切り替えたケースも少なくない。例えば三重大学が行っているベトナムフィールドスタディ（以下VFS）では、2020年度はオンラインによるプログラムに切り替えた。本稿では、こうしたオンラインを活用したフィールドスタディプログラムでの学生の学びが、従来の現地におけるプログラムとどのような点で異なるのかに着目し、オンライン国際共修の可能性と課題を考察することを目的としている。

オンラインによる海外研修は、実際に海外渡航しなくても研修先の授業を受講したり、交流したりすることができるため、今回の感染症拡大に関わらず以前より存在していた（新見他，2021）。日本のみならず留学生受け入れに積極的なアメリカやオーストラリアなどでは、オンライン語学留学もプログラム化されて有償で行われている。しかしながら、オンライン受講生向けの座学による授業が中心に行われるため、現地学生との共修や交流の機会が少なくなってしまうこともある。

これに対して、協働・共同プロジェクトを行う国際連携学習としてCOIL（Collaborative Online International Learning）がある（池田，2016）。池田（同）によれば「国内にいながら若者に大きなインパクトをもたらすことのできる学習実践」であり、

留学するための「レディネス」としても有効であると述べている。またCOILの学習モデルとして、池田（同）はニューヨーク州立大学によるモデルを用いながら、3段階を提示している。①互いを知り合うためのタスク、②互いの国や文化を知るためのタスク、③協働して何かを作り出すタスク、である。

本稿ではこうした先行研究も参照しながら、オンラインによる国際共修では何が学べ、何が学べないのかを検討していきたい。その事例として、三重大学で行われている短期海外研修のベトナムフィールドスタディ（以下、VFS）を取り上げる。

このVFSは筆者たちが担当している海外研修プログラムで、三重大学の大学間交流協定校であるホーチミン市師範大学の日本学部と共同で実施しているものである。本稿では、2020年度の参加者による事後アンケート及び『2020年度ベトナムフィールドスタディ報告書』（以下『報告書』）をもとに、参加者が学べたこと、学べなかったことを読み解き、オンライン海外研修の可能性と課題を考察していく。

筆者らはこれまで、異文化の状況を活用した国際的な学習の場で学生が身につけるべきこととして、Leask（2007）の国際的視点に沿って、現地におけるVFSでの学生の学びを分析してきた（奥田・松岡，2021）。その中でLeask（同）が提示した国際的視点のうち、次の5点があったことを示した。

- 他文化の知識と文化的多様性への理解
- 社会的および文化的に多様な状況において効率的に働く力

- 文化を超えたコミュニケーション力
- 専門的なことや私生活で異文化の人々と積極的に関わる力
- 自文化と異文化の視点がなぜ、どのように類似したり、相違したりするのかの認識

また、これら以外にもベトナムの人が温かく接してくれたことへの「感謝の気持ち」や現地での「五感を通じた異文化理解」が得られたことも示唆した。本稿では、こうした点がオンラインではどのような形で表れたのかも考察していく。

2. オンラインでの VFS の目的と内容

VFS はもともと 1 週間程度の現地研修を通じ、異文化にあって主体的に行動し、参加メンバーと協力しながら活動を進め、積極的にコミュニケーションを図ろうとするグローバル人材に求められる能力・資質を育成することを目的としたものであった。概ね Leask の国際的視点に繋がると考えられる。2020 年度は最終的にコロナ感染の収束が見えないことから Zoom を用いたオンラインでの実施に切り替えた。

2020 年度に実施した VFS は、以下の 3 つの内容から構成される。1 点目はホーチミン市師範大学の学生との日本語とベトナム語の相互学習である。Zoom のブレイクアウト機能を用いてランダムに 4、5 名のグループ分けを行い、挨拶や発音、両国のことわざと擬態語・擬音語を相互に教えあった。2 点目は参加学生が設定した探究テーマに沿ってホーチミン市師範大学の学生とグループを作り調査を実施することである。しかしながら協働での調査であっても、コロナ感染拡大のため複数人での外出を伴う活動を強制できず、結果的にはインターネットや文献などによる情報収集に限定された。今回は「教育」「農業」の 2 つのテーマが学生から提案され、日越を比較する形で探究内容や方法を話し合っ進められ、最終日に発表会が行われた。3 点目は相互の生活文化を紹介しあうことで異文化理解に繋げることである。プログラム内外で SNS や Zoom を活用して昼食や普段利用する店舗、何気ない周辺の風景などを写真等で紹介するものである。

両大学の教員と学生にとって全てが初めての試みであり、手探りの状況で準備や実施を進めていったため、特に学生にとっては不安感を拭えなかったが、逆にそのことで両方の学生が主体的に協働することにも繋がった。また、現地での観光視察などのプログラムがない分、協働学習に焦点を当てることが可能となった。

なお、2020 年度の参加者は 4 名で、日程は 2021 年 3 月 8 日から 12 日までの 5 日間である。またホーチミン市師範大学側の参加学生は 9 名であり、日本語能力は高い者から初心者まで多岐に亘る。

3. 学生による学びと経験

本章では参加学生への事後アンケートから「実際にベトナムに行かなくても学ぶことができたと思うこと」「実際にベトナムに行かなければ学ぶことができなかったと思うこと」への回答、及び『報告書』の学生の感想から、学生が述べる「学べたこと」と「学べなかったこと」を抽出する。「身についた」り「鍛えられた」りした記述は、学生自身が能力の向上を感じたことを示しており、ここでは学びとして捉えた。また同じく『報告書』から、学びには至っていないまでも、学生の気づきや印象、刺激や驚きなどに関する記述は認識を変化させる可能性のある経験として抽出した。それぞれ Leask (同) による国際的視点と照合して、どのような視点に繋がる可能性のある学びや経験の機会だったのかを考察する。なお、言語の学びは広く他文化の知識として捉えた。

3.1 学生が学べたこと

「全体としてベトナムと日本の類似点・相違点などを考える過程で、日本のことを改めて学び直すことができたかと思います。オンラインで海外の学生と話をするには、時差を考えたり、言語の違いを考慮したりと困難な部分が多くあることを学びました」

- 自文化と異文化の視点がどのように相違したりするのかの認識に繋がる学び（オンラインならではの困難さを含む）

「言語はベトナムに行かなくても学べたと思う。音声と文字、意味がわかれば言語は身につくから」

- 他文化の知識と文化的多様性への理解への学び

「ベトナムの学生の意見や、ベトナムについての知識など口頭で聞ける範囲であれば学ぶことができた」

- 他文化の知識と文化的多様性への理解への学び

「相手にわかりやすく言葉を伝えることの重要性を学んだ」

- 文化を超えたコミュニケーション力への学び

「会話を楽しみながら言語を学ぶことができた」

- 他文化の知識と文化的多様性への理解への学び

「イレギュラーな点も多かったが、その分臨機応変に対応するという力が身につく、オンラインという場面で工夫していく力も身についたと私は思う」

- 多様な状況において効率的に働く力への学び

「相手に伝える力、相手を理解する力などが鍛えられ、とてもいい経験ができました」

- 文化を超えたコミュニケーション力への学び

「相手の話をよく聞き理解しようとする力や、相手に理解をさせるために言葉をかみ砕いて分かりやすく説明する力のようなコミュニケーション力が鍛えられるとてもいい経験ができました」

- 文化を超えたコミュニケーション力への学び

3.2 ベトナムに行かなければ学べなかったこと

「日本の時間割で動き、日本の食事を食べ、日本のニュースを見てという生活の中の一部としてオンラインの活動が入っても、現地に行った時のようにベトナムの生活を体感することはできませんでした」

- 五感を通じた異文化理解の機会の喪失

「ベトナムの生徒が普段どのように過ごしているのか、家や道の風景などはあまり見て知ることはできないと感じました」

- 五感を通じた異文化理解の機会の喪失

「ベトナムの雰囲気や文化は実際に行き行って学びたかった。暑いと言っていたがどれほど暑いのか、半袖で大丈夫なのか（中略）は実際に行かなければわからないと思う。また、バイクが多い、道が渡りにくいことも実際に体験してみたかった」

- 五感を通じた異文化理解の機会の喪失

「自分で実際に目で見て、肌で触れるという経験ができない分、印象や記憶には残りにくいと感じた。口伝えで聞くことや画像や動画だけでは感じ取ることができない経験が、（中略）差があると感じた」

- 五感を通じた異文化理解の機会の喪失

3.3 学生による気づきや印象、刺激などの経験

「私たちの『当たり前』と感じていることも他国の人から見たら、そうでないことも多くあることが分かった」

- 自文化と異文化の視点がどのように相違したり

するのかの認識に繋がる経験

- 他文化の知識と文化的多様性への理解の経験

「日本人とベトナムの生徒が受け取る言葉の感じ方の違いや、言葉の解釈の違いがベトナムの生徒とパワーポイントを作っていく中で感じることができました」

- 自文化と異文化の視点がどのように相違したりするのかの認識に繋がる経験

「フィールド調査を通して日本とベトナムの教育の違いを知ることができたという点もあるが、それ以外にも、オンライン上でも国際交流ができること、日本の当たり前は他国から見た時には当たり前ではないことや、ベトナムの学生から現地のお話を聞くことでベトナムの魅力などが分かった」

- 他文化の知識と文化的多様性への理解の経験

「全体的にベトナム学生の日本語能力の高さに驚き、私が英語などの外国語で今回のような議論ができるかといわれれば自信がないため、刺激をうけ、今後挑戦してみたいと思いました」

- 専門的なことや私生活で異文化の人々と積極的に関わる力への意欲に繋がる経験

「それぞれの学生がそれぞれ自分自身の考えを持っており、自分が違うと思った場合には（中略）はつきり伝えてくれることです。日本においては（中略）自分の意見をはつきり言わない場面もあり、私としてはとても刺激を受けました」

- 他文化の知識と文化的多様性への理解への経験

「オンラインでの参加方法についてとても驚きました。ベトナムの学生は（中略）自分の好きなところから参加しており、日本の大学生のように家で静かに一人で講義を受けていることと大きく異なると感じました」

- 他文化の知識と文化的多様性への理解への経験

「ベトナムの人たちはとてもフレンドリーに話してくれて、フィールド調査にもとても協力的で、意見も積極的に出してくれた。ベトナムのこのことのみならず、日本のことについても一部調べてくれていて、とても驚いた。ベトナムの人たちがとても協力的だったおかげで私のやる気も出た。ベトナムの人たちが頑張っているから自分も頑張らなければと思った」

- 専門的なことや私生活で異文化の人々と積極的に関わる力への意欲に繋がる経験

「気軽にお互いの文化の違いを知ることができる点がメリットだったと思う」

- 他文化の知識と文化的多様性への理解への経験

「言葉のすれ違い以外にも時間の感覚など印象に残ることがありました（中略）開始時には全員集まり始まるのですが、終わる時間になると、どれだけ作業が途中になっていても解散するということがとても印象に残っています」

- 自文化と異文化の視点がどのように相違したりするのかの認識に繋がる経験

4. 考察—まとめにかえて

このように学生の回答や報告内容に多く見られたのは「他文化の知識と文化的多様性への理解」に繋がる学びや経験である。次いで「自文化と異文化の視点がどのように相違したりするのかの認識」「文化を超えたコミュニケーション力」に繋がる学びや経験の機会になったことが分かる。一方、「五感を通じた異文化理解」を得られる機会だったと判断できるような学生の回答は見られなかった。また、今回はベトナム側が研修を受け入れる立場ではなかったことから、「感謝の気持ち」の醸成は見られなかった。

これらはベトナムを実際に訪問して行われた研修での学びとどのように異なるのだろうか。筆者らの研究（奥田・松岡，2021）によれば、「文化を超えたコミュニケーション力」が「自文化と異文化の視点がどのように相違したりするのかの認識」と同様に多く見られた。これは現地での研修の方が文化間の相違を認識しつつ、それを超えるコミュニケーションの機会が多かったからだと考えられる。これに対して今回のオンライン研修では、コミュニケーションの機会が比較的限定されたために、「文化を超えたコミュニケーション力」に繋がらうる学びとしての学生の声が増減したのではないかと考えられる。

また、今回のオンラインによるプログラムでは「他文化の知識と文化的多様性への理解」に繋がっているものの、それが「自文化と異文化の視点がどのように相違したりするのかの認識」に至っていないことや、「五感を通じた異文化理解」を伴っていないことが伺える。これらはオンラインでしか交流できないという時間的制約によって学生交流の中で質問しあったり、知識以上の理解を強く得たりする十分な

機会がなかったためと考えられる。

そうした時間的、空間的制約の中でも「専門的なことや私生活での異文化の人々と積極的に関わる力」に繋がる経験が見出された点は、協働によって得られた成果であり、今後の可能性を見出せる。

これらから、先述の COIL の学習モデルを参照すると、次のことが言えよう。即ち②「互いの国や文化を知ること」、③「協働して何かを作り出すタスク」はオンライン研修でも可能性があったが、①「互いを知るためのタスク」として五感や深い視点を伴った理解を得る機会が不足していたと考えられる。

本稿では、海外研修の VFS を事例としてオンラインによって国内共修の一定の成果を得られる可能性を示してきた。一方で参加学生が文化の違いを知るだけでなく、それを深めるための幅広い「学び」とはどのようなものを更に分析し、明確に整理した上で、どのような経験の機会の充実が求められるのかを検討する必要がある。

参考文献

- 池田佳子（2016）「「バーチャル型国際教育」は有効か」, 日本学生支援機構ウェブマガジン『留学交流』 67, 1-11.
- 奥田久春・松岡知津子（2021）「海外研修の知見を生かした国内での国際共修の可能性」『三重大学高等教育研究』 27, 85-88.
- 新見有紀子・星野晶成・太田浩（2021）「ポストコロナに向けた国際教育交流」日本学生支援機構ウェブマガジン『留学交流』 120, 26-41.
- 三重大学国際交流センター（2021）『2020年度ベトナムフィールドスタディ報告書』
- Leask, B. (2007) International teachers and international learning. In Jones E., & Brown S. *Internationalising Higher Education*, Routledge, 86-94.

†OKUDA Hisaharu* and MATSUOKA Chizuko

*2: Potentials and Issues of International Collaborative Learning in Online Study Abroad Programs

*College of Liberal Arts and Sciences, Mie University 1577 Kurimamachiyachou Tsushi, Mie, 514-8507 Japan,

*2 Center for International Education and Research, Mie University 1577

Kurimamachiyachou Tsushi, Mie, 514-8507 Japan